夜間中学を社会に向けて発信しよう！
夜間中学を知っていますか？

春・秋連結学期 | 京田辺校地開講科目

doshisha
kyotanabe
imadegawa

1. 目的・概要

the purpose and an outline

夜間中学について

第2次世界大戦後、生活のために働き学校に行けない子どもたちが存在しました。彼らに学ぶ場を提供することから夜間中学が生まれ、その後数年間で各地に広がり増え続けました。現在、生徒の年齢は10代から80代と幅広く、貧困や戦争で子どもの時に学校に行けなかった人、被差別部落の人、障がい者、在日韓国・朝鮮人、などがいます。最近の傾向としては、中国からの帰国者、難民、結婚などによって日本に住むようになった外国人の増加が挙げられます。このことからも、夜間中学のあり方が時代によって変わりつつあることがわかります。

2. 成果達成度

the achievement degree

具体的な私たちの活動について

私たちは、6月に初めて奈良市立春日夜間中学を訪問し、それ以来夜間中学訪問や、インタビュー、研究大会への参加などに取り組んできました。活動を通して思ったのは、夜間中学生にとって文字と言葉とは大事なツールである、ということです。それは戦時中であったり、また貧困などの問題により文字と言葉を奪われた人たちが、同じ場所に集い、学び、触れ合うことでそこに自分の居場所を見出し、自らも取り戻しながら楽しさや喜びを得ていく姿を実際に目の当たりにすることで感じられたことであり、また取材する側の私たちも、そんな彼らの姿を見て、「真の学びとはなにか」について改めて考えさせられました。以下、具体的な活動内容について報告します。

● ゲスト講義

私たちは、写真家や活動家、新聞記者など多くのゲストを迎え、お話を聞いてきました。特に印象に残ったのは、某全国紙記者を迎え、「記者の目から見た夜間中学」についてお話を伺ったことです。夜間中学の問題を長年追い続けているということもあり、中でも「メディアは常に異質なものだから取材相手に同化できないし、してはならない。また相手のすべてを視界できないことを前提に取材することが大切だ。」と言う取材における真摯な姿勢が印象的で、夜間中学を学ぶ私たちも「発信する」と言う点において大いに学ぶべき点がありました。

● 文化祭

10月には文化祭にも参加しました。餃子を作ったり、飲み物を売るなど、夜間中学生が主体となって積極的に参加していて、中でも地域の人の理解のもと、皆が一体となって一つのものを作り上げていこうとする姿勢がとても印象的でした。

● 全国夜間中学研究大会について

2009年12月4日、神戸で第55回全国夜間中学校研究大会が行われました。その目的としては、夜間中学校の意義を教育関係者や行政、市民に広く伝えること、全国の夜間中学が取り組んでいる実践や課題を知り、解決すべき様々な問題について討議することなどがあります。私たちが発表したのは、「増設・教育条件・啓発活動」に関する領域別の分科会でした。分科会では、自主夜間中学の現状を交流し、公立化への課題を明らかにすること、夜間中学生の学びを保障するために教育条件をどう整備するか、行政との交渉など、各地の取り組みと交流することを目指しています。

そこで学んだことは、まず全国の公立夜間中学や自主夜間中学にそれぞれの事情や問題があることです。たとえば、北海道では樺太からの引き揚げの人などもいて、現在、札幌、函館、旭川、釧路、とどんどん学習できる場を増やしているそうです。また、京都には京都市内に1校しか学ぶ場がないことが問題となっており、通学をどのように支えていくかが大きな課題だそうです。

次に、自分たちの活動の意味について考えました。その場には人生を夜間中学にかけて活動している多くの方々がいらっしゃって、自分たちはおそらく異質な存在なのだろうけど、その私たちがそこに参加することにこそ意味があるのかもしれないと思いました。学生が関心を持ち、活動すること自体が夜間中学の啓発になりうるのではないかと感じました。

3. プロジェクトを通じて

through a project

プロジェクト科目を受講するまで、夜間中学について正確に知っている学生はいませんでした。「夜間中学」とは一体何なのか、私自身もわからずに受講しました。

夜間中学に行く前に、ゲストの方の話を伺った際、戦争と関わっている場所であることや、外国人の生徒が増えている現状、識字をする場だということなど多くを知りました。そこから、自分たちの中での夜間中学のイメージが形成されていきました。私自身の中では、年配の方たちが、文字を手に入れるための、特別な場所だという印象がありました。

実際に訪問して、現場に自分の足で初めて行ってわかることがたくさんあるのだと気付かされました。1つ目は、その雰囲気です。夜間中学は異質な空間だと思い込んでいましたが、そうではありませんでした。生徒同士の掛け合いや、勉強する姿勢などは、みな1人の学生で、自分たちと変わりないのだと感じました。自分自身が中高生だった時を思い出したほど、その空気感は自分の経験したものと変わりありませんでした。2つ目は、その歴史の重みです。体験者が語る言葉は、リアリティのある貴重なものであり、理解しようと思っても簡単には理解できないものだということに気付きました。だからこそ、

その人にしか語ることのできない貴重なものであるし、取材に時間をかけて信頼してもらう必要に気付きました。

初めはイメージさえもなかった夜間中学が、座学のゲスト講義などを通して、自分の中で形作られていきました。しかし、その新たにできたイメージがフィールドワークによって、更にその形を変えました。自分ではわかった気になっていても、実際にその場でそこにいる人たちと同じ空気を吸うことでしかわかりえないことがあるのだと感じました。

私たちの反省点としては、取材の不十分さが一番に挙げられると思います。私たちと同時期に、読売テレビの取材クルーが春日中学に入っていて、その取材を間近に見たのですが、やはり自分たちとの違いに圧倒されました。取材対象に密着する中でしか見せてもらえない顔があるのだと思いました。学生の自分たちでは限界があるかもしれないけれど、時間をもっとうまく使って取材できればよかったと反省しています。

column

[リーフレットの作成について]

私たちが、文字を使って発信したいと思ったのは、テレビと新聞の取材を両方受けてみて、新聞の方が継続的な取材ができると思ったからです。そして、さらに自分たちの目的に合っていると感じたため、文字を選びました。発行の目的としては、新聞記者を招いた時に、報道機関が夜間中学を扱うときはどうしても商業主義に偏りがちで、だからこそ美談にしてしまうという傾向にあるということを聞きました。一方、私たち学生は自由に情報を発信できる身です。その中で、美談に偏らない報道がしたいということが学生の共通認識でした。自分たちが自分たちの足で踏みこんだ夜間中学は、テレビや映画で見るようなきれいごとの世界とは少し違っていました。そこには実際に学生が学んでいるという「日常」がありました。それを伝えたいという思いがあり、きれいごとにはしたくないと思っています。

作成後の展望としては、参加した学生が今後も夜間中学に関わり続けることが重要だと考えています。来年度以降に参加する学生への引き継ぎや、来年度の訪問への同行を初めとして、自分たちが夜間中学に関心を持ち続けることが重要だと感じています。